歴史エッセイ

挑戦こそわが生命

視覚障害者たちの挑戦史

谷合 侑 ◆ 著

社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター

推薦の言葉

社会福祉法人　視覚障害者支援総合センター理事長
高　橋　　實

このたび、「挑戦こそわが生命」が出版されましたことを、心から喜びたいと思います。

私の自分史を振り返りますと、私も一人の挑戦者であったことを、しみじみと感じます。私は北海道の山村に生まれました。初め旭川盲唖学校に入学しましたが、学年が進むにつれて鍼按業に疑問が生まれ、他の職業にあこがれるようになりました。岩手盲学校に転校した時、その時の校長先生が一冊の点字新聞を手渡し「この点字新聞は日本で唯一のものです。この新聞の編集長は盲人です。一度この人に手紙を出して君の将来について相談したらよい。」と勧めてくださいました。この時、私は「ジャーナリストを目指そう」と、心に決めました。

その後、三つの難関が待ちかまえていました。

第一の難関は、大学進学でした。日本大学の法学部に「点字で受験をしたい」と申し出

ましたが、断られました。当時、点字受験を認めていた大学は数校にすぎませんでした。盲学校の校長先生と直談判をしてもだめでした。しかし、幸いなことに理解のあるY教授の斡旋で、文学部で受験できることになりました。

第二の難関は、就職でした。念願の点字新聞の会社に願書を出しましたが、「定員がない」との理由で断られました。そして二年間の就職浪人の苦渋を味わいました。

第三の難関は、現在も続いている退職後の事業です。私の味わった「大学進学の苦渋」「就職の苦渋」を後輩たちには、何としても味わってほしくない、との強い思いがありました。そして「盲学生情報センター」を設立しました。これが現在の「視覚障害者支援総合センター」です。この運営は容易なことではありませんでした。現在もその苦難は続いています。しかし、皆さんの温かい支援と協力のおかげで、本年設立二〇周年を迎えることができました。感謝です。

この書の挑戦たちの歴史を読みますと、どうしても私の歩んできた道と重なり、昔も今も、視覚障害者の生きる道は容易ではないことを実感させられます。

歴史書は専門用語が多くて読むのに苦労しますが、この書はエッセイとして書かれていて、大変読みやすくなっています。しかも、歴史的史実に沿って記述され、現代の私たちに生きる勇気と指針を与えてくれる内容となっています。

一般の人が読める視覚障害者の歴史に関する本は大変少ない中で、この一冊は大変貴重な本であると思います。今まで視覚障害者に関わってきた人たちにも、全く関わってこなかった人たちにも、広く推薦できる一冊です。

この書を一読することによって、視覚障害者に対する理解を深めていただき、今後とも一層のご支援をお願いいたします。

平成十八年七月一日

まえがき

視覚障害とは何と大変な障害なのだろう。それにもかかわらず視覚障害者たちは、何とエネルギッシュで前向きなんだろうと、私は思います。白い杖を持って、あるいは盲導犬とともに、町の中を歩いている姿を見ると、40年間歩行訓練士を続けている私でさえ、感動させられます。それはまさに挑戦者の姿です。

トリノでのパラリンピックのニュースは、今までになく大きくマスコミで報道されました。「盲導犬」や「点字ブロック」のニュースも、たびたび報道されています。障害者に対する理解が、全国隅々まで行き届くようになってきたことは、大変うれしいことです。

しかし、「障害者の歴史上の人物を何人知っていますか」の問いに、どれほどの答えが返ってくるでしょうか。小・中学校の教科書に、以前からよく取り上げられているのは、「塙保己一」です。また、高等学校の歴史教科書に、最近取り上げられるようになったのは「琵琶法師」です。しかも、その記述の程度はごく簡単なもので、障害者の歴史を理解するにはほど遠いものです。

塙保己一が「和学講談所」という、今でいえば公立大学のような施設を作りました。こ

れは杉山和一の「鍼治講習所」にも並ぶものです。江戸時代に作られたこの両施設とも、世界に誇れるものです。この「和学講談所」に、時の老中・松平定信は「温故堂」の名称を贈りました。論語の中の「温故知新」（古きをたずね、新しきを知る）からとった言葉です。

古代から近代に至るまで、職業を獲得して自立した生活を全うし、さらに新しい境地を開こうと、果敢に挑戦してきた、多くの視覚障害者がいます。それらの人々を、大勢の人たちに広く知って欲しいとの願いから、このエッセイを書きました。本文だけでも通読していただき、少しでも共感していただければ、この書の目的は達せられたことになります。

今後とも、皆様の視覚障害者へのご支援とご協力をお願いいたします。

平成一八年三月十七日

歴史エッセイ

挑戦こそわが生命（いのち）

―視覚障害者たちの挑戦史―

目　次

第一部　琵琶法師たちの挑戦……1
第1章　琵琶法師の祖神・人康親王……1
第2章　初めての琵琶法師・蝉丸―その1……19
第3章　初めての琵琶法師・蝉丸―その2……36
第4章　平家物語の制作に係わった琵琶法師・生仏……57
第5章　平家琵琶の完成者・明石覚一……81

第二部　江戸時代における新職業への挑戦……108
第1章　新しい箏曲に挑戦した八橋城談……108
第2章　鍼按業へ挑戦した杉山和一……130
第3章　国学に挑戦した塙保己一……153
第三部　近代先覚者たちの挑戦……170
第1章　高木正年―清貧の中での闘志……170
第2章　熊谷鉄太郎―エクセルシアの夢を追って……187
第3章　森恒太郎―盲人村長奮闘記……204
第4章　宮城道雄―新しい日本音楽への挑戦……219
第5章　中道益平―愛なき人生は暗黒である……238
第6章　近藤正秋―運命を愛し希望に生きよ……253
第7章　本間一夫―点字図書館はわが人生そのもの……269

第一部　琵琶法師たちの挑戦

第1章　琵琶法師の祖神・人康親王

はじめに

中世から近世にかけての盲人たちの職業集団を「当道座（トウドウザ）」といいます。江戸時代の杉山和一も塙保己一も、当道座の一員であったわけですが、中世の主要な職業は、琵琶を伴奏にして平家物語を語る「平曲家」でした。中世のほぼ四〇〇年は、当道座は平曲家の集団といってもよいものでした。近世の江戸時代では平曲が衰退し、代わって箏曲三弦（ソウキョクサンゲン）の音曲業と鍼按（シンアン）業が主要な職業になります。

このシリーズでは、古代の平安時代の中期から始まり、中世の平家物語を語った琵琶法師たちの果敢な挑戦の足跡を、諸史料をもとに検証したいと思います。

琵琶法師の祖神とされる人康親王（サネヤスシンノウ）、琵琶法師の開祖ともいえる蝉丸（セミマル）、平家物語の製作に

かかわった生仏（ショウブツ）、平家物語の覚一本を完成させた明石覚一（アカシカクイチ）などが、この挑戦史の登場人物になります。今回は、琵琶法師たちの祖神としてあがめられている人康親王の実像に迫りたいと思います。

1　人康親王の伝承記録

琵琶法師たちの座を「当道座」と呼んでいますが、「当道要集」(1)「当道大記録全」(2)などの伝承記事によりますと、座の祖神とされる「人康親王」について、次のように書かれています。文中、史実的に確実な事柄を、私が挿入した箇所もあります。

（祖神「天夜の尊（アマヨノミコト）」というのは人康親王（八三〇～八七二）のことである。この人は第五四代仁明天皇（八一〇～八五〇、在位八三三～八五〇）の第四皇子(3)であった。

山科に住んでいたので山科の宮とも申した。特に詩歌の道に優れ、在原業平（アリハラノナリヒラ）（八二五～八八〇）とも親交があり、また当時山科に住んでいた小野小町（オノノコマチ）や僧正遍昭（ソウジョウヘンショウ）（八一六～八九〇）の六歌仙の人々とも交流があった。文徳天皇の八五八（天安二）年、二八歳の時に病気で失明され、翌年、親王の号を辞退し仏門に入り、法名を法性禅師と号した。この宮は学問ばかりでなく、詩歌・管弦の造詣が深く、多くの公卿や殿上人（デンジョウビト）が通った。また、

盲人たちを集めて四弦（琵琶のこと）玉笛（横笛のこと）催馬楽（古代歌謡の一つで琵琶や箏などを伴奏に謡うもの）などを教えていた。八七二（貞観一四）年二月一七日に四二歳で死去され、この時、人康親王の御家領地が大隅・薩摩・日向にあったが、清和天皇（琵琶の名手で人康親王とも親交があった）の時、これらを残らず当道へ下された。八八五（仁和元）年一一月一一日、光孝天皇より「天夜の尊」の神号を給わり、山科郷四宮村柳谷山に御陵を造り、社を四宮と号した。八八五年は光孝天皇の即位の翌年に当たり、人康親王の十三回忌でもあった。《八八六（仁和二）年二月一七日、皇太后は追善供養にと光孝天皇に願い出て、盲人に検校・勾当の二官をくだされた。》その後、当道に下された人康親王の領地は、後鳥羽院（在位一一八四～一一九八）の時に子細があって返された。四条天皇（在位一二三二～一二四二）はこれを憐れんで、当道へ運上配当を下されることを決めた。）

図1「人康親王の系図」をみていただくと、この伝承記事が明確になります。この伝承は、今まで多くの研究者が全くの虚構で史料価値のないものとされてきました。(4)

しかし、私はほぼ真実に近いもので、史料として再検討されて然るべきものと思っています。ただ《…》の「検校・勾当の二官をくだされた」こと、また当時はまだ「当道」という名称はなかったので、この点については疑問があります。これらのことについては、

54仁明
（810～850
在位833～850）
‖
藤原順子
（809～871）
‖
藤原澤子
（？～839）

55文徳
（827～858
在位850～858）
名は道康、父は仁明
母は良房の妹順子
在位中は良房が政治の実権を握り主導する

56清和
（850～880
在位858～876）
父は文徳
母は良房の娘明子
866、外祖父良房に政務を任せる

57陽成
（868～949
在位876～884）
父は清和
母は良房の姪高子
乱行が絶えず関白基経によって廃される

58光孝
（830～887
在位884～887）
名は時康、父は仁明
母は澤子、諸臣の推挙により55歳で即位
基経が関白に等しい権限を付与され政務を補佐する

59宇多
（867～931
在位887～897）
基経の死後は関白を置かず、菅原道真を抜擢して政治の刷新に努める

60醍醐
（885～930
在位897～930）
時平・道真を左右大臣として積極的な親政を行う、道真失脚後は藤原氏の進出を招く

人康親王（第4皇子）
（830～872）
母澤子
858、28歳の時失明し親王号を辞退し山科に遁世する
学問・文芸に堪能のため　多くの公卿山科を訪れる
２月17日死去

娘
‖
藤原基経
（836～891）
良房の養子となり
872、右大臣
876、陽成天皇の摂政
881光孝天皇の関白宇多天皇の関白

時平
（871～909）
899、左大臣
901、道真を左遷させる

穏子
（885～954）
醍醐の后
朱雀・村上の母

図１　人康親王の系図

明石覚一のところで詳細に検討したいと思います。

2　人康親王の系図と時代の背景

当道座の祖神そして琵琶法師たちの祖神とされる人康親王は、仁明天皇の第四皇子として八三〇年に生まれました。第一皇子の道康が文徳天皇、第二皇子の宗康親王は仁明天皇の死去の際に出家、第三皇子の時康が光孝天皇で、その弟の第四皇子が人康親王ということになります。彼は、学問特に有職故実（ユウソクコジツ）に通じ、和歌の才能に秀で、管弦特に琵琶に堪能であったといいます。この若くて聡明な親王の周りに、多くの公卿が集まり、多くの女性たちが注目するのは自然の成り行きです。輝かしい未来を約束された彼でしたが、九歳の時に母・澤子（サワコ）を亡くし、二〇歳の時に父・仁明天皇を亡くします。しかも、八五八年二八歳の時、病気で失明します。どれほどの落胆であったか計り知れません。彼は翌年、親王号を辞退し、落髪して山科（ヤマシナ）に遁世します。法性禅師と号して、十禅寺を創建してそこを住居とします。彼がここに住居を構えたことから、この辺りを「四宮（シノミヤ）」と呼ぶようになりました。山科のこの辺りは、洛中から粟田口（アワタグチ）を経て東へ入った洛外で、当時の街道筋ではありましたが、まだまだ寂しい所でした。それにも関わらず、洛中の公卿や殿上人たちが、

引きも切らず彼のもとに通い、学問・管弦を習ったといいます。彼は特に琵琶の演奏が得意でした。この頃、帝王の楽器といえば琵琶でした。琵琶の「秘曲伝授」を「灌頂（カンジョウ）」[5]といいますが、「文机談（ブンキダン）」[6]という本によれば、（歴代天皇の中で灌頂にまで達した天皇は清和天皇（人康親王の甥）であり、帝王の御灌頂はこれを始めとする）と書かれています。

人康親王は清和天皇より二〇歳年上ですが、この二人が琵琶の技量を競ったであろうことは容易に想像できます。

琵琶の秘曲（石上流泉（イシガミリュウセン）・楊真操（ヨウシンソウ）・啄木（タクボク））の伝授を灌頂と称することが、宮廷社会に一般化するようになったのは、西園寺実兼（サイオンジサネカネ）（一二四九～一三二二）が教師を勤めた伏見天皇（一二六五～一三一七）の頃からだといわれています。清和天皇はその先駆をなした人であったわけです。なお、琵琶については次章で詳しく書きます。

3　不遇な境遇を克服

八七二年二月一七日、人康親王は山科四宮の十禅寺で死去しました。四二歳の若さでした。その霊前に、山科の近くに住んでいた小野小町から、一首の歌が届けられました。その歌は次のようなもので、「小町集」に残されています。

今朝よりは悲しの宮の山風や
又あふさかもあらじと思えば

彼女の生存年は不明ですが、人康親王とほぼ同年齢だと思われます。彼女は仁明天皇（人康親王の父）を心から慕い、仕えていたといわれています。この二人は御所の中で、ほぼ一〇年間（八四〇～五〇年頃）は共に暮らし、詩歌管弦の道で交流があったと推測されます。人康親王は、九歳の時に母（藤原澤子）を、二〇歳の時に父（仁明天皇）を亡くし、さらに二八歳で失明するという不運に遭遇します。この若き親王に彼女がどれほど心を痛めたか想像できます。人康親王が失明されて山科に隠棲する時、彼女も後を追って山科に移り住んだものと思われます。小野小町は伝説の多い人で、特に多くの男性から求愛されてもことごとく断り、生涯独身で通したことはよく知られています。彼女の恋人説はいろいろな人が推定されていますが、私は人康親王であったと確信しています。この一首には、こうした切々たる想いが込められていると感じます。

系図を見ていただくとわかるように、人康親王の二人の兄は二つの王統を形成していたことがわかります。(7)

文徳王統は、文徳・清和・陽成と三代三四年間続きますが、この王統の特徴は、藤原良房の朝廷との姻戚関係による政治支配でした。仁明天皇と良房の妹・順子（ジュンシ）の子が文徳天

皇でしたし、文徳と良房の娘の明子（アキラケイコ）の子が清和天皇でした。しかも清和が九歳、陽成が八歳で即位するという「幼帝」であったため、良房が摂政として実際の政治を行ったのです。三四年続いた文徳王統は良房の死と陽成天皇の乱行によって終末を迎えます。この異常な政治を刷新し、仁明天皇時代の「承和（ジョウワ）の政治」に戻すことを目標に成立したのが、光孝天皇だったのです。

光孝王統は、光孝天皇が五五歳という高齢で即位した時に始まります。藤原良房の強引な政治関与で、文徳王統が三代続いたために、光孝天皇の即位が五五歳という高齢になり、しかも彼は在位わずか三年にして、短い生涯を閉じてしまいます。人康親王は、兄の光孝天皇とともに、文徳王統の陰に冷遇された不運な境遇にあったのです。そのために学問の道に、そして詩歌・管弦の道に精進したのだと思います。

光孝王統を後ろ盾となって推し進めたのが、良房の養子となった藤原基経でした。基経は人康親王の娘と結婚し、光孝・宇多天皇の関白の地位に就きますが、政治を積極的にリードするということはありませんでした。光孝天皇・宇多天皇と共に、かつての仁明天皇の「承和の政治」を目標にしました。光孝天皇は在位わずか三年で病死しますが、この後を継いだ宇多天皇は二〇歳で即位し、青年天皇にふさわしく積極的な政治を展開しました。菅原道真を抜擢したこともその一つです。

4　仁明朝の楽制改革

当時の舞楽を担っていたのは雅楽寮の人々でした。雅楽寮は律令制度が完成した時（大宝律令が七〇一年）には、すでに作られていたといわれています。初めは伎楽（仮面を用いた舞踏で六一二年にわが国に伝えられたとされる）が中心でしたが、後に「倭楽」「唐楽」「高麗楽」「百済楽」「新羅楽」を教習する所になりました。これ以後、雅楽寮では唐楽を中心に外来の舞楽の伝承に重きが置かれてきました。これを大改革したのが、仁明朝の楽制改革でした。(8)

改革の第一は、楽器の整理・統一でした。弦楽器に例をとりますと、当時使用されていた弦楽器は「和琴（六弦）・琴（七弦で中国のもの）・瑟（二五弦の箏）・箏（一三弦で唐のもの）・新羅琴・琵琶（四弦でヨツノオとも呼ぶ）・五弦琵琶・阮咸（明楽の四弦楽器）・七弦楽器・くご（百済琴で竪形のハープ）・ほうしゅくご（舟形のハープ）・がくご」の一二種類に及びました。これを「和琴・琵琶・箏」の三種に整理したのです。

第二は、雅楽の左右両部制です。従来から国別に楽師を置いていたものを、左方唐楽・右方高麗楽としました。こうして雅楽寮では、完全に二分されたものが教習されるようになったのです。このうち弦楽器の琵琶と箏は唐楽でのみ用いられました。

第三は、日本人による雅楽の曲が盛んに作曲され、公の場で演奏されるようになったことです。唐風の雅楽から和風の雅楽へと変化した時期でした。

第四は、雅楽寮の整理で大幅な人員削減を伴いました。そのため雅楽寮の人々に加えて、近衛府（コノエフ）の人が雅楽に参加するようになり、主として宮廷行事の舞楽に従事するようになります。これ以後、舞楽という芸能が雅楽寮から近衛府へ、さらに皇族・貴族・民間の人々へと拡大していくことになります。

清和天皇・人康親王・蝉丸などが琵琶の名手として登場してくるのには、このような時代的な背景があったのです。

系図で特に注目されるのは、人康親王の娘が藤原基経と結婚して、この頃の実力者であった関白時平を生んでいることです。人康親王は関白の父であったわけですが、それは彼の没後のことです。

5　山科の四宮の地

私が人康親王の御陵を訪れたのは、平成一四年五月一九日でした。京阪電鉄「京阪四宮駅」を降りて旧東海道を西へ歩くと四宮川（中世の四宮河原）があり、橋を渡るとすぐ右

① **人康親王陵**：十禅寺境内の北側が御陵となっており、現在は宮内庁管理

② **十禅寺**：人康親王の館跡とされ、859年創建で、この地区を四の宮と呼んでいる。

③ **徳林庵**：人康親王の菩提を弔うために創建された寺、現在は山科地蔵を管理している。

④ **人康親王・蝉丸供養塔**：2人の名が併記されている石碑で、設立年代は不明。

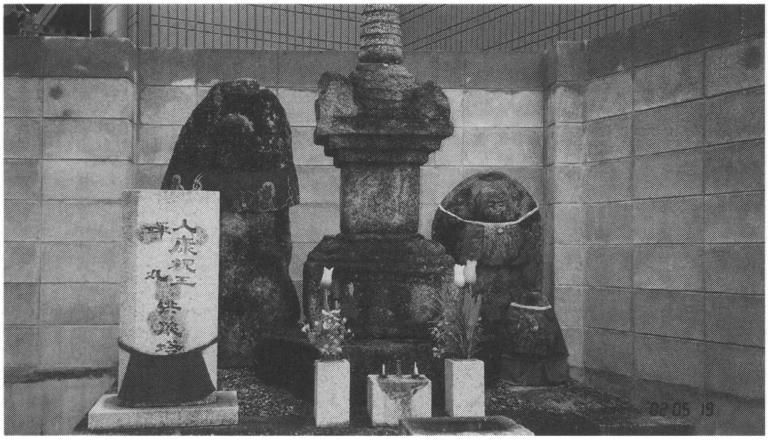
⑤ **山科地蔵**：京都六地蔵の1つで、六角形で大菩薩尊像をまつる。平安末期の創立。

⑥ **一燈園**：岩橋武夫が修業した施設で、明治39年西田天香により創設。

図2　山科四宮地区の地図

手に六角の山科地蔵堂があります。地蔵堂の後ろに「人康親王・蝉丸供養塔」の石碑がひっそりと建っています。これらを管理しているのは徳林庵という寺です。この寺は約四五〇年前に、南禅寺の雲英禅師（ウンエイゼンジ）が人康親王の菩提を弔うために創建したものといわれています。この徳林庵のすぐ北側に、十禅寺があります。図2「山科地図」を参照してください。

私が訪ねた時にいただいたこの寺の縁起を見ますと、次のように書かれています。（この寺は仁明天皇の第四皇子の人康親王を開山とし、八五九年に創建された。この辺りを四宮というのはこの寺の創建から発祥したといわれている。この境内の東北に、現在は宮内庁が管理している人康親王陵がある。度々の戦火で荒廃していたものを、一六五五年、一〇九代の女帝・明正天皇（メイショウテンノウ）（在位一六三〇～一六四三）が再興されたのが現在の当寺である。）



人康親王・蝉丸供養塔

山科の地は、その昔、中臣鎌足（六一四～六六九）の居住地でした。彼は大化改新を成功させた後、娘を天智天皇の后にします。天智天皇が亡くなった時、その遺志により、六九九年に山科陵が造られます。この陵は四宮の東方、少し離れた山麓にあります。山科に通じる道路は、山城道（中世では宇治大道と呼ばれた）といわれ、宇治―木幡―六地蔵―山科―逢坂のコースでした。平安時代になると山科の地区では、寺院建築が盛んになります。八四八年には藤原胤子（インシ）（宇多天皇の女御）の勧修寺などが建てられました。山科は真言密教寺院の盛んな地域となったのです。(9)

また、山城道のコースにもあるように、六地蔵の信仰が盛んでした。現在でも京都では六地蔵巡りというのが盛んで、山科地蔵には多くの人が

人康親王陵墓入口

参拝します。しかし、この北側にある十禅寺と人康親王陵墓に参拝する人はほとんどいないようです。

6　山科四宮塾の琵琶法師たち

八六八年のある晩秋の日、山科四宮の十禅寺から、琵琶を伴奏に催馬楽（サイバラ）を歌う声がにぎやかに聞こえてきます。琵琶を伴奏に歌を指導しているのは、人康親王（この時は法性禅師と号していました）です。ここはまさに「山科四宮塾」いえるような観を呈していました。洛中から山科の洛外へ、若い公家や殿上人が有職故実や詩歌管弦を習いにきました。そればかりでなく、身元のはっきりしている盲人たちを集めて、特に琵琶の演奏方法と催馬楽(10)などの歌謡を教えていました。

四宮川のせせらぎの音とともに、琵琶の音と朗々と歌う声が、秋の澄んだ空気の中に響き渡ってきます。

この十禅寺の敷地は、人康親王が住まわれた邸宅の跡です。平安時代の八七〇年頃には、公卿や殿上人のほかに多くの盲人を集めて、琵琶や笛を演奏しながら歌謡を謡っていた姿が目に浮かびます。「山科四宮塾」といえるような集まりがあり、この地から後の琵琶法

師、例えば「小右記（ショウユウキ）」に書かれている琵琶法師や、「今昔物語（コンジャクモノガタリ）」に書かれている蝉丸などが、誕生したのではないかと推測されます。人康親王と蝉丸は生存年代は同じではありませんが、大変近い年代であることを考えると、蝉丸もあるいはこの流れをくむ一人であったと思われます。この四宮から蝉丸が庵室を結んだ会坂の関まではすぐ近くであり、徳林庵の門前にある「人康親王・蝉丸」と並記された供養塔があることは、この二人の間に特別な関係があったことは確かです。

おわりに

最後に、人康親王は中途失明された人で、周囲の人々から尊敬され、学問・芸能を多くの人々に教えました。しかも、当時の盲人たちにも芸能の道を伝授していたのです。このすぐ後の時代に登場する蝉丸のことや、九八五年に藤原実資（サネスケ）の邸宅に招かれた琵琶法師のことを考えあわせますと、人康親王の実像は、以上のように考えるのが自然だと思います。

後代の琵琶法師たちが座を結成した時、人康親王を祖神としたのは、なぜでしょうか。その理由の一つは、前記のように「山科四宮塾」といえる所で、多くの盲人たちを集めて、琵琶の演奏と歌謡を教えていたという事実が、言い伝えられていたことによると思われま

す。その二つは、「当道座」の縁起書が、座を結成した「平曲家」によって作られているということです。このことは人康親王の時代の仁明・文徳・光孝天皇の子孫が、いずれも平氏姓を与えられ、九～一〇世紀には桓武平氏と並んで、源氏・藤原氏・橘氏と並ぶ有力氏族に位置づけられていることです。このことは、平曲が平家一族の鎮魂歌であることを思うと、中世の琵琶法師と平家物語を結びつける原点になっていると思われます。

注記

（1）改訂史籍集覧本または日本庶民生活資料集成巻一七

（2）「奥村家蔵　当道座・平家琵琶資料」大学堂書店　昭和五九・一二

（3）藤原順子（八〇九～八七一）
　　道康（八二七～八五八、在位八五〇～八五八、文徳天皇）
仁明天皇（八一〇～八五〇、在位八三三～八五〇）
　　宗康（出家）
藤原澤子（？～八三九）
　　時康（八三〇～八八七、在位八八四～八八七、光孝天皇）
　　人康（八三〇～八七二、八五八失明し出家）

人康親王は第一皇子が文徳天皇、第三皇子が光孝天皇であったので、光孝天皇の弟ということになる

（4）「当道秘訣」白井寛蔭　江戸安政期の著（人康親王は盲人ではなく当道要集は全くの虚構とする説）

「日本盲人史」中山太郎　昭和四〇年（白井寛蔭の説を全面的に肯定し、当道要集は史料価値のないものとの説）

「日本盲人社会史研究」加藤康昭　一九七四年（重要な史料として詳細に検討を加え、伝承のもつ社会的機能について考慮すべきとの説）

「奥村家蔵　当道座・平家琵琶資料」昭和五九年（人康親王の伝承は平家物語を語る盲僧集団が、彼らの本来の呪術的信仰を基層として表現されたものとの説）

（5）灌頂というのは仏教の言葉で、如来の五智を象徴する水を仏弟子の頭頂に注ぎ、仏の位の継承を示す密教の儀式である。阿闍梨（アジャリ）位をうるための伝法灌頂（デンポウ）、弟子となるための受明（ジュミョウ）灌頂、多くの人々に仏縁を結ばせるための結縁（ケチエン）灌頂とがある。

平家物語の「灌頂の巻」は、結縁灌頂の意味を込めて、明石覚一によって追加されたものと思う。

（6）「文机談」隆円の著で、わが国の琵琶の歴史について最も詳しくかかれている説話集

（7）日本史講座第三巻「中世の形成」九頁　東京大学出版会　二〇〇四年七月

（8）「日本芸能史1原始・古代」二五七頁　法政大学出版局　一九八一年六月

（9）「洛東探訪・山科の歴史と文化」淡交社　平成四年一〇月

（10）雅楽の声楽の一種で、平安初期に朗詠とともに誕生した。「伊勢海」「ころもがえ」などの曲がある。伴奏楽器は、ひちりき、龍笛、琵琶、箏などが使われた。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みになりたい場合には
社会福祉法人　視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

歴史エッセイ

挑戦こそわが生命

視覚障害者たちの挑戦史

2006年　11月１日　初版
著　者　谷合　侑
発行者　社会福祉法人　視覚障害者支援総合センター
〒167－0043　東京都杉並区上荻２丁目37番10号　Keiビル
TEL（03）5310－5051　FAX（03）5310－5053
振替口座　00160－4－16103

印刷所　タナカ印刷株式会社
〒104－0031　東京都中央区京橋３丁目12番４号
TEL（03）3567－2551　FAX（03）3564－2920

挑戦こそ
わが生命